

霞

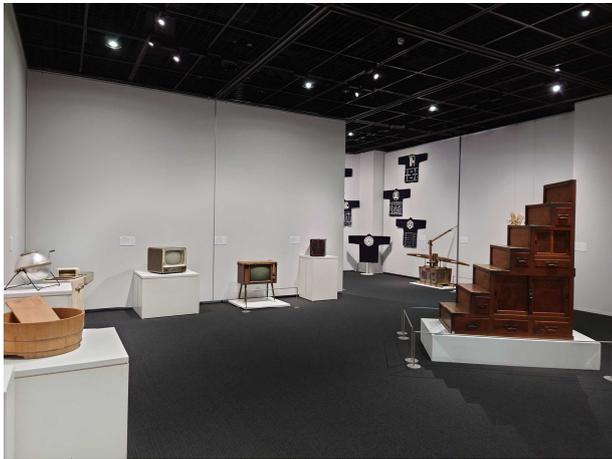
— 2022年度 博物館だより —

土浦市立博物館
令和5年3月2日発行(番外第9号)

土浦市立博物館は、大規模改修工事のため、令和4年7月5日(火)から令和6年1月上旬(予定)まで休館いたします。博物館だより「霞(かすみ) 番外」では、毎月、工事の進捗状況や館外で開催する展覧会や講座の情報をお伝えします。休館中の「おうちミュージアム」(解説動画)では、土浦市内の史跡や文化財などの見どころを紹介します。

博物館は休館中！(9)「校外学習を受け入れました！」

土浦市民ギャラリーで、「デザインとしてみる『むかしの道具』」・「^{とき}を^{つむ}ぐ—はたおり伝承活動30年—」を3月5日まで開催しています。博物館の職員が、見学に来た小学生へ「むかしの道具」の使い方や「はたおり」の方法などを伝えると、興味深そうに聞いていました。



「デザインとしてみる『むかしの道具』」展示風景



「^{とき}を^{つむ}ぐ」展示風景

◆博物館からのお知らせ◆

●『^{やすのぶ}長島尉信来翰集』を販売しています

長島尉信(1781~1867)は、土浦藩に仕え、検地や土浦城の修復などに携わった、江戸時代後期の農政学者です。

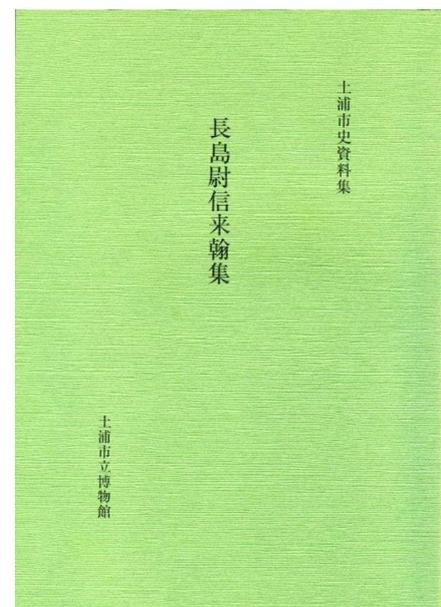
本書は、市史編さん事業の一環として、彼のもとに届いた書状324点を翻刻し、その内容の要約と注釈、差出人の経歴紹介などを掲載したものです。

土浦城東櫓にて、2,500円で販売しています(B5判、342ページ)。郵送販売をご希望の方は、送料として別途360円分の切手を同封のうえ、現金書留または郵便為替で下記住所までお申し込みください。

〒300-0043

茨城県土浦市中央2丁目16-4 亀城プラザ 2階

土浦市立博物館仮事務所



2023年3月 おうちミュージアム解説

水神宮

—湖畔に佇む水運の痕跡—

江戸時代、土浦は霞ヶ浦水運によって栄え、多くの物資が行き交いました。現在は暗渠となっている川口川の河口付近には、川湊である河岸が設けられ、多くの荷船が停泊していました。今日の土浦港には数多くのヨットや遊覧船が停泊しているものの、当時の面影はほとんど残されていません。

霞ヶ浦水運の数少ない痕跡の一つが、川口2丁目にある水神宮です（写真1）。社伝によれば、水神宮は天保7（1836）年1月に川口町に有志によって創建され、舟運業者や漁業関係者の守護神とされてきた、とあります。この水神宮は、主に水難除けや火災除け、水に関わる商売の繁昌を願う人々によって信仰されてきました。境内には灯籠のほか、船の錨が奉納されています。木造の拝殿や本殿は築かれず、「水神」と刻まれた石祠が祀られています。石祠の台石には、寄進をした願主らの名前が刻まれています（写真2）。

このうち、世話人の駿河屋民蔵と高浜屋源助、須釜半兵衛の3名は、天保13年に作成された船積み荷物の帳簿のなかにも、その名が記されています。この帳簿は石田河岸（現市内手野町）から出荷された木材と、その輸送の担い手（船頭）を書き留めたものです。帳簿に記された多くの船頭は屋号が記されていませんが、民蔵と源助は名前とともに屋号が記されていることから、船積問屋（河岸問屋）を営んでいたと考えられます。一方、願主の和田屋定右衛門と、世話人の中島清助は、嘉永2（1849）年4月に作成された土浦河岸の船積み運賃値上げに関する取り決めで、立会人としてその名が記されています。運賃の値上げは船手（船の乗組員）から提起され、船積問屋一同はこれを承諾しています。このことを踏まえると、定右衛門と清助も河岸問屋を営んでいたと考えられます。

今日、土浦港の一角に佇む水神宮の石祠は、水難事故なく商売が繁盛するようにと願う、土浦河岸の河岸問屋らの信仰心によって寄進されたものと考えられます。（西口正隆）



写真1 水神宮の境内

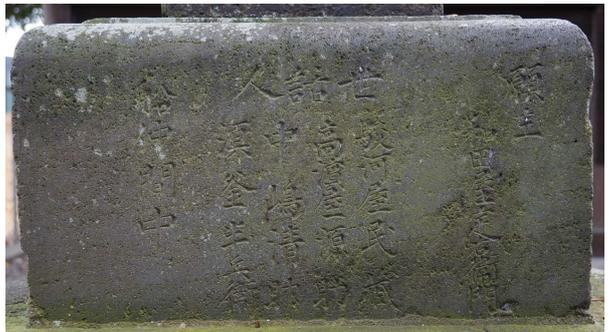


写真2 石祠台石の刻字

	世話人	願主
船仲間中	須釜半兵衛 中島清助	和 田 屋 定 右 衛 門
	高 浜 屋 源 助	
	駿 河 屋 民 蔵	

左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。



霞（かすみ） 2022年度 博物館だより（番外第9号）
編集・発行 土浦市立博物館 茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928 FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/dir000378.html>

博物館だより「霞」番外第10号の刊行は、4月1日（土）を予定しています。
※「霞」バックナンバーは、当館ホームページからもご覧になれます。（カラー版）